

『告白』 作：ポチ子

男 「好きです！付き合ってください！」

女 「・・・はい？」

男 「ずっと前から好きでした！付き合ってください！」

女 「はい？」

男 「あなたの事が好きです！お願いします！」

女 「いや、ここ私の部屋ですよ。」

男 「はい！」

女 「誰ですかああ、あなた！え、なんで私の部屋にいるんですか！？どこから入ったんですか！？」

男 「え、その扉から・・・」

女 「いや、そういうことじゃなくて。確かに部屋の扉は一つしかないけど！」

男 「あなたのお母さんに「娘さんに告白しに来ました！」っていったら、入れてくれました！」

女 「ちよっ、お母さん！何してんの！仮にも娘の部屋だぞ、知らん男を入れちゃダメだって。」

男 「それで返事は？」

女 「へ？返事？・・・急に入ってきた人の告白なんてオーケーす

るはずな・・・」

男 「いや、やっぱりいいです。返事は後でいいんで。」

女 「よくない、よくない、私は良くない。すぐに返事出せるんで。

昼寝して目覚めたら突然いた知らない人の告白を了承する人
はいないです。」

男 「僕があなたを好きになったのは・・・」

女 「え？話聞いてます？」

男 「ある雨の日の事でした・・・」

女 「話続けなくてももらえますか？聞いてないんで、知らないんで、
付き合わないんで！」

男 「その日、僕は傘を忘れてずぶ濡れになりながら、家への帰り
道を急いでいました。その時です、一人の女性が現れたのは。
その女性は僕に、「良ければどうぞ」って小さな折り畳みの傘
を渡してくれたんです。そうそれがあなたとの出会い。それ
が、僕があなたに一目ぼれをした瞬間です。」

女 「・・・。」

男 「優しいあなたの笑みに、僕の心は奪われてしまいました。」

女 「・・・それ、私じゃないですね。」

男 「あ、そうだ。これ返そうと思って持ってきたんです。」

女 「聞いてます？それ、私じゃないです。」

男 「傘、ありがとうございました。」

女 「わざとですか？わざと聞いてないんですか？コレ、私の傘じゃないんです。私、折りたたみ傘と小さくて濡れるから嫌いなんです。むしろ使わない派なんです。何ならお父さんの傘、借りパクしてるくらいなんで。」

男 「お名前、明日香さんっていうんですね。傘に書いてありました。かわいいお名前ですね。」

女 「私、名前、典子です。持ち主違う人なんで、その人に返してあげてください。」

男 「この傘が、あなたと僕をつないでくれた。これは運命です。」

女 「ああ、運命なのかもしれないですね。私じゃないですけど。」

とにかく、私明日香さんじゃないんで。あなたの運命の人はたぶん近所にいると思うんで、早めにそっちにいつてもらえますか？」

男 「長居してすみません。今日はここで失礼しますね。返事待ってますから。」

女 「だから、違いますから。私じゃないですから。」

男 「それじゃあ、また来ます。」

女 「来ないください。絶対私じゃないんで。ちょっと聞いてます？ねえ、私じゃないんで！ねえ！！・・・帰っちゃったよ。」